【日本学術会議主催 日本老年医学会共催シンポジウム】
超高齢社会に求められる高齢者医療の担い手の育成：教育体制整備
へのアクションプラン策定に向けて

3. 高齢者医療のあるべき姿～国立長寿 医療研究センターから望むこと～

Future of geriatrics and care for older people—perspective from National Center for Geriatrics and Gerontology—

荒井 秀典

要 約

国立長寿医療研究センターは、高度先駆的医療、新しい機能回復医療、包括的・全人的医療を行うとともに、老化と老年病の研究、新しい医療技術の開発、社会科学を含む幅広い研究を行うため設立された。同時に、高齢者医療の普及に向けた教育・研修を行うことも求められている。超高齢社会を迎えた我が国において国立長寿医療研究センターは老年医学・老年学・老化研究の推進を通して、その重要性を普及させ、政策提言を行っていくことが求められている。今後とも日本老年医学会と連携し健康長寿社会を目指した活動を継続することが求められる。

Key words 認知症、フレイル、エンドオブライフケア、ポリファーマシー

(日老医誌 2018 ; 55 : 228-231)

はじめに

高齢者医療のあるべき姿について長寿医療研究センターのミッション及びセンターが何を行っているかに触れながらまとめてみたい。

国立長寿医療研究センターの沿革

国立研究開発法人国立長寿医療研究センターは昭和55年の日本学術会議による設立勧告により、長寿科

学研究センター検討会が設置され、平成7年7月国立療養所中部病院長寿医療研究センターとして開所したことに始まる。その後平成16年3月には国立長寿医療センターとなり、病院、研究所が一体となって、老化研究、高齢者医療に取り組み、厚生労働省のシンクタンクとしての役割を担うようになった。その後平成22年4月1日に独立行政法人国立長寿医療研究センターとして独立行政法人化された。我が国の6つのナショナルセンターの中でもっとも歴史が浅いセンターであるが、高齢化が進む中、以下に記すようにきわめ

国立研究開発法人国立長寿医療研究センター病院

連絡責任者：荒井秀典 国立長寿医療研究センター〔〒474-5811 愛知県大府市森岡町7-430〕

e-mail: harai@ncgg.go.jp

doi: 10.3143/geriatrics.55.228

図 長寿医療研究センターの全貌

て重要な役割を担っている。

国立長寿医療研究センターのミッション

当センターの設立目的は、「加齢に伴って生ずる心身の変化及びそれに起因する疾患であって高齢者が自立した日常生活を営むために特に治療を必要とするものに係る医療に関し、調査、研究、技術の開発、これらの業務に密接に関連する医療の提供、技術者の研修等を行うことにより、国の医療政策として、加齢に伴う疾患に関する高度かつ専門的な医療の向上を図り、もって公衆衛生の向上及び増進に寄与すること」とされており、「高齢者の心と体の自立を促進し、健康長寿社会の構築に貢献すること」がその理念となっている。

また、センターの基本方針としては人の尊厳や権利を重視し、病院と研究所が連携して高い倫理性に基づく良質な医療と研究を行うこと、病院では高度先駆的医療、新しい機能回復医療、包括的・全人的医療を行うこと、研究所では老化と老年病の研究、新しい医療技術の開発、社会科学を含む幅広い研究を行い、老人

保健や福祉とも連携し、高齢者の生活機能の向上をめざし、成果を世界に発信し、長寿医療の普及に向けた教育・研修を行うことである。もともと病院と研究所としてスタートしたが、図に示すように現在では、もの忘れセンター、認知症先進開発センター、老年学・社会科学研究センター、健康長寿ロボットセンター、長寿医療研修センター、歯科・口腔先進医療開発センター、メディカルゲノムセンター、治験・臨床研究推進センター、ロコモ・フレイルセンターを持ち、老年学、老年医学、老化研究において最先端の研究を行うことを目指している。

国立長寿医療研究センターにおける研究開発

このように各センターにおいて戦略的かつ重点的に研究及び開発を進めることは、国民が健康な生活及び長寿を享受することのできる社会を形成するために極めて重要であり、研究と臨床を一体的に推進できるナショナルセンターとしての特長を活かすことにより、研究成果の実用化に大きく貢献することができる。具

体的には、

- ・認知症の先制治療薬、早期診断技術の開発や予防（コグニサイズの開発・改良など）方法の確立等の研究開発

- ・フレイル（虚弱）・ロコモ（運動器症候群）などの老年病に関する診断・予防についての研究開発

- ・歯髄幹細胞を用いた再生医療についての研究開発

- ・2025年問題を見据えた在宅医療やエンドオブライフケア、認知症高齢者の徘徊対策等の老年学・社会科学的な研究開発

- ・バイオバンクと連携した老化・老年学に関する大規模コホート研究

に取り組んでいる。

また、臨床研究及び治験を進めるため、症例の集約化を図るとともに、臨床研究の質の向上、研究者・専門家の育成・人材確保、臨床研究及び治験のための共通的な基盤の共用（レジストリ研究）、患者との連携及び国民への啓発活動等への取り組みなどさらなる機能の向上を図り、基礎研究成果を実用化につなぐ体制を構築することが求められている。

国立長寿医療研究センターの役割

以下に各項目における役割を考える。

1. 医療の提供

病院の役割については、認知症疾患医療センター、在宅療養後方支援病院としての機能を果たした上で、今後策定が予定されている地域医療構想策定ガイドライン等を踏まえた高度急性期機能等の医療機能を担っている。当センターは長寿医療に対する中核的な医療機関であり、研究開発成果の活用を前提として、医療の高度化・複雑化に対応した医療を提供することが求められており、そのことが我が国の医療レベルの向上に繋がると考える。

医療の高度化・複雑化が進む中で、質が高く安全な医療を提供するため、各医療従事者が高い専門性を発揮しつつ、業務を分担しながら互いに連携することにより、患者の状態に応じた適切な医療を提供するなど、医師及びその他医療従事者等、それぞれの特性を生か

した多職種連携かつ診療科横断によるチーム医療を推進し、継続して質の高い医療の提供を行っている。具体的には Dementia Delirium Support Team (DST)、Nutrition Support Team (NST)、ポリファーマシー削減チーム、褥瘡対策チームなどを通して高齢者に対する多職種連携モデルを構築している。

また、認知症の人、家族を支援するための医療体制の構築及び、医療・介護連携を推進するとともに、認知症の家族教室、認知リハビリテーションなどにも積極的に取り組んでいる。また、高齢者の在宅療養生活を支援し、切れ目のない医療の提供を行うため、モデル的な在宅医療支援を提供している。さらに患者に対する患者同意取得（インフォームドコンセント）等において、人生の最終段階におけるモデル的な医療の提供を行うことをめざしている。

2. 人材育成

人材育成は、長寿医療研究センターが医療政策を牽引する上で特に重要なものであり、国内外の有為な人材の育成拠点となるよう長寿医療及びその研究を推進するにあたりリーダーとして活躍できる人材の育成を行うとともに、モデル的な研修及び講習の実施及び普及に努めている。高度かつ専門的な医療技術に関する研修を実施するなど、モデル的な研修及び講習を実施し、普及に努める。その一環として、認知症施策推進総合戦略(新オレンジプラン)に基づき、認知症サポート医養成研修修了者数の増加に寄与している。また、国内外から多職種の研修を受け入れるなど国際的にも老年学、老年医学センターとしての存在感を増すことが求められる。

3. 政策提言

研究、医療の均てん化等における課題や我が国の医療政策の展開等のうち、特に研究開発に係る分野について、患者を含めた国民の視点に立ち、科学的見地を踏まえ、国への専門的提言を行っている。

4. 医療の均てん化

医療の評価と質の向上、さらに効率的な医療の提供を実現するために、関係学会とも連携しつつ、ゲノム

情報、診療データ、患者レジストリ（登録システム）等を活用し、研究分野において指導力を発揮するとともに、センターが担う疾患にかかわる中核的な医療機関間のネットワーク化を推進し、高度かつ専門的な医療の普及を図り、医療の標準化に努めている。情報発信にあたっては、関係学会とも連携しつつ、診療ガイドラインの作成に関与し、ホームページを活用すること等により、診療ガイドラインの普及に努めるなど、国内外のセンターが担う疾患に関する知見を収集、整理及び評価し、科学的根拠に基づく予防、診断及び治療法等について、国民向け及び医療機関向けの情報提供の充実を図っている。

おわりに

このように超高齢社会を迎えた我が国において国立長寿医療研究センターは老年医学・老年学・老化研究の推進を通して、その重要性を普及させ、政策提言を行っていくことが求められている。今後とも学会と連携して、健康長寿社会を目指して活動を継続していく。

著者の COI（Conflict of Interest）開示：本論文発表内容に関連して特に申告なし